

雪のひとひら、知らせる。

光野 朝風

雪のひとつひら、知らせる。

---

そういえば、忘れていた。

ふいに思ったのは、いい大人が真冬の歩道で真夜中に滑って転んだからだった。

誰もいないのが幸いだった。

人の往来の激しい昼間なら恥ずかしくてすぐに立ち上がり、服についた雪を払って何事もなかったかのように歩き去っていただろう。

しかし今私は道路脇にできた腰くらいの高さの雪山に倒れこんだまま、ふわふわと降ってくる雪を見上げていた。

今夜の寒さはことのほか厳しい。

肌が突っ張って膨れすぎた紙風船のように破れていきそうなくらい冷気がピシリと容赦なく張り付いている。

毛糸の帽子を深々と被っていたのもよかった。

頭を覆っていなければいつまでも雪山を枕代わりにしてはいなかった。

直接だったら雪を真綿に感じるどころか針の山だった。

空から降ってくる無数の雪が目の直前まで迫り、目の中に飛び込んでくる。

結晶はどうだろうか。

手袋の上に乗ったひとつひらの雪を、息がかからないように注意を払い、ぐっと息を止めて目を凝らす。

見えた。

六角形の角から六本の雪の枝が生えている。形は日によって違うはずだ。結晶の形は、冷え込んでいかなないと見えない。少しでもあたたかいと団子で降ってくる。

綺麗だった。

息苦しくなり、ふうと息を吹きかけてしまうと、雪の結晶は小さな水滴になって消えた。

車の音もない静けさの中、雪が雪山に落ちるサラサラサラという音が耳の奥まで届いてくるのがわかる。

いつの間にか、忘れていたことがたくさんあったのかもしれない。

人目のない、倒れこんだ雪山で、大人としての立場もすっかり忘れて子供のころの自分をかすかに思い出していた。

小さなころ友達と雪山を掘ってトンネルを作ったり、氷の城を作ろうと懸命に庭や公園の雪を積み上げていたっけ。

大人になり一軒家を引越しまんション暮らしになってからというもの、生活のために懸命に生きてきた。

こんな風にシンシンと張り詰めていくような静けさの中にいたのは覚えていないくらい前のことだろう。

じっとしていても寒さが手袋の中にも染みてきて手がかじかんで固まってくる。

シャララと雪が枝から落ちる。

そこに誰がいるんだな。目に見えない、小さな何かがそこに。

子供のころ庭の静けさの中、夕暮れを早く迎えて暗くなった時、かすかな気配に耳をすませている。

雪山の中に穴を掘ってこもり、心臓の音を聞き、息を吐く音や、吐く息の白さに神経をすませている。

雪の落ちた枝の方を見ると雪で木がデコレーションされていた。

ケーキの中か別の国にいるような気持ちになって、心をうきうきさせるようなことなんて近年あったらどうか。

木の枝の上に妖精のようなものを期待して見上げることなんてあったらどうか。

もし今他の人が私の姿を見たら、何をしているのだろう、と思うだろう。

思い出しているのだ。大事なことを。

思い出そうとしているのだ。子供のころの感覚を。

「しばれる」という。

「冷たい」「寒い」とも違う。

まるでバリバリと凍りついたものが音を立てて引き裂かれたり、体中が冷気できつく縛られ、がんじがらめにされてしまうくらいの冷え込みなのだ。

そんな厳しい寒さの中でも元気に遊んでいたのだ。

それがいつの間にか大人になって、大人としての視線を気にして生きるようになった。そんな視線を気にするあまりか、頭の中に出来上がった常識から、子供の夢に対して「そんなことはない」と頭ごなしに言うようになっていた。

子供のころは偏見などなく、ただ厳しい寒さと向き合い、想像力を膨らませながら暮らしていたのに。

毎日の除雪や屋根の雪下ろし、積もった下の雪山に向かって二階から飛び降りたり、雪が降る前には植物を守るための雪囲い。それらの日々の暮らしの中で外が白くなって冬が来た、と思うと同時に街が別物になったかのような新鮮さ。

ああ、あの頃はもっと空気そのものに麗しさを感じていたものだな、ということ思い出した。

雪国で育ってきた皮膚感覚が体の奥底まで染み付いているのだ。

ふうっと長いため息を空に吹きかける。白い息の柱が消える。私は反省しなければならないのだ。

実は今は仕事の付き合いで飲んできた帰りだった。

それに、一週間前ほどから子供と喧嘩して仲直りしていない。

今度の春、小学校に入る五歳の息子だ。

私がクライアントの急な内容の変更に子供との約束をキャンセルした。

仕事はどうか間に合って、今日は相手側の上機嫌さにほっとして帰ってきたところだったが、息子にとって何一つ問題は解決していない。

息子にとって大事なものは親との空気なのかもしれない。

親が発している空気をどう感じているのかなのかもしれない。

仕事をして、お金を稼いできて、家庭を支えて、息子も満足だろうと自分勝手に満足してしまいそうになるが、そうではない。

私の仕事と息子は関係ない。私と息子との関係が大事なのだ。仕事なんて子供からすれば大人の言い訳にも聞こえるだろう。

「よっ」と掛け声を上げて起き上がり、雪を払う。

子供のころ、私はもっとたくさんものを感じていたはずだ。こうした周囲の一つ一つの変化に一喜一憂していた。

新雪に彩られた時の心の変化や、白い雪が汚れていたり、何もないまっさらな雪原に足跡がついた時の妙な落ち込み。そりを引っ張ってもらい乗っていた時に、どうして綺麗なそりの跡の中に足跡がつかないといけないのだろうと悩んでいたこともあった。

息子も、私とのことを、そんな風に微細に感じながら一喜一憂させているのかもしれない。

私はあの時息子になんて言ったっけ。

「しょうがないだろ。仕事なんだから」

我ながらひどいことを言ったものだ。

ちゃんと謝ろう。明日は息子も休みだ。

家に帰り、凍りついたような体に風呂のお湯をかけて溶かしていく。

子供も妻も夜が遅いのですやすやと眠っていた。寝顔を風呂で思い浮かべる。

「あーっ」と声を上げながらお湯につかる。冷えていた指先からお湯がジーンと染みってくる。

心の中の凍りつきそうだった何かも、とけていきそうな感じがした。

風呂の中で息子のことを思う。連日仕事が期日に間に合うかどうかの緊張状態で夜も遅く、ろくに話もしていなかったことに気がつく。

一週間自分の子供に何があったかもわからない父親は薄情だよな、と改めて反省する。

風呂上りにもう一度息子の顔を見ると、布団を蹴飛ばしていたので、ちゃんと肩口まで掛けて頭を撫でた。冷えないようにしないといけないから。

次の朝、きちんと起きると妻が「夜遅かったのに早起きして、今日も仕事があるの?」と聞いてきた。

約束破ったの、ちゃんと謝ろうと思って、ということを伝えると、妻は微笑みながら「そう」と言ってコーヒーを注いでくれた。湯気の上がる熱いコーヒーが喉を通り、じわりとあたためながら胃に落ちる。

外を見ると昨日の雪はすっかり止んで、また白く薄い膜が街に敷かれ、朝日を反射させてまばゆさを発していた。

やがて子供が起きてくる。眠たそうに目を細めながら、顔を洗うために洗面所へと行く。着替え、テーブルへと着いたとき、私は見ていたテレビを消して息子に言った。

「この前、約束破ってごめんな。今日は、一緒に遊べるか?」

「うん」

露骨な不満顔はしないが、ややぎこちない。しかし大事なものはこれからだ。

「かまくらって入ったことなかったろ? 今日公園で作ってやるから、入ってみるか?」

「うん。入る」

少しだけほっとした気持ちになった。心もじんわりあたたまる。

今日は、うんと大きなものを作ってやろう。喜んでくれるだろうか。

外に出た時、雪の一粒一粒が光にあたり笑っていることに気がつき「そうだったのか」と声を出した。

「どうしたの？」と聞く息子に、これから「雪の妖精」の話をしようと思い、私は友を語るように話し出した。

さらりと、目の前の枝の雪が落ちて光った。